

資料

看護学生の公衆衛生看護学実習における「健康教育」 実施週別の自己評価比較

田中富子*¹

要 約

本研究の目的は、学生が捉えた健康教育を行うための必要条件と、公衆衛生看護学実習3週間の中で健康教育を行った週別と自己評価の関連を分析することにある。公衆衛生看護学実習を履修した4年生22人を対象に調査を行った。学生の自己評価と健康教育を実施した実習週別には有意差を認めなかった。このことは、学生が捉えた【学生の準備性】【指導者の支援】により、実習開始前に健康教育の準備が概ね完了していたことが影響したといえよう。また、学生は健康教育を準備する過程をとおり単独実施への覚悟を決め、指導者や対象者から肯定的なメッセージを受けたことで自信を獲得し、【学生の達成感】に至ったと考えられる。しかし、「参加者が相互に話し合える雰囲気づくり」への自己評価が低かったことは、実習開始前の【実習体制】を実習施設と大学が連携して構築する必要があるといえる。

1. 緒言

「健康教育」はヘルスプロモーションの理念に基づくセルフケア能力の向上と、地域活動を強化するヘルスサービスの有用な方法として、対人保健サービスの中心的な担い手である保健師の重要な看護技術¹⁾といえる。保健師教育における健康教育の展開は、「保健師に求められる実践能力と卒業時の技術項目と到達度」(2010)において、指導のもとで実施できるレベルが目標²⁾とされた。また、全国保健師教育機関協議会においては全学生の必須体験項目³⁾とされ、さらに対象者理解を踏まえた健康教育の企画立案から実施・評価までの一連を、臨地実習で学ぶことの重要性⁴⁾が報告された。これらから吉備国際大学では、実習市町の協力のもとに学生全員が1テーマ以上の健康教育を単独で体験できる公衆衛生看護学実習の体系としている。

矢島ら⁵⁾は、学生が地域住民を対象に健康教育を行うためには、準備に多くの時間やエネルギーを費やす必要がある。しかし、学習者としての立場しか経験してこなかった学生は健康教育を行うことで達成感や専門職としての責任の自覚を促し、実習への強い動機づけとなることを報告している。太田⁶⁾は、

健康教育の目的を個人や集団が自らの力で健康を保持・増進するために、正しい知識や技術を習得し、健康行動への実践力を身に付けることとした。田中⁷⁾は、学生がこの目的を認識するためには住民を対象に健康教育を行うことが重要であるが、学生の健康教育は対象者の理解やテーマへの知識不足から一方交通的な健康教育に偏り、対象者の主体的な自己管理能力を促進する健康教育には至らなかったことを明らかにした。

学生の健康教育実践力を高めるための対策として、牧内ら⁸⁾は対象者を理解し内容に関する知識を身に付けるための時間を確保するための、十分な準備が重要であるとした。しかし、市町村保健師は分散配置や多岐にわたる業務拡大により、学生指導に当たる時間の確保が困難な現状にあることから、学生が健康教育を実施できるレベルまでに到達することへの指導には、大きな負担や制約が存在すると推察される。また、公衆衛生看護学実習を行う市町が作成した実習計画に基づき健康教育の準備を行うことから、健康教育を実施する実習週数により指導時間や学生の準備に差が生じる可能性がある。

そこで本研究の目的は、健康教育実践力を育成す

*1 吉備国際大学 保健医療福祉学部 看護学科
(連絡先) 田中富子 〒716-8508 高梁市伊賀町8 吉備国際大学
E-mail: tomiko@kiui.ac.jp

る資料を得るために、吉備国際大学において健康教育を行った実習週数と学生の自己評価の関連を明らかにするとともに、学生が健康教育を実施するために必要だと捉えた内容について分析することとした。

なお、ここでいう健康教育とは地域の複数の住民に対し、意図的に計画した健康に関する教育活動を一斉に行うものとする。

2. 吉備国際大学の公衆衛生看護学実習の概況

吉備国際大学における公衆衛生看護学実習は、実習Ⅰ（4単位）と実習Ⅱ（1単位）の5単位を4年次に履修する。実習Ⅰは9月から11月の間に、県内の保健所（1週間）と保健所管轄の市町（3週間）で4週間の実習を連続で行う。健康教育は、実習市町の年間保健事業計画に基づき、実習前にテーマ・会場・対象者が示される。学生は教員と指導保健師との連携した指導を実習開始前に受け、健康教育企画書・指導案・媒体を作成し実習に臨む。実習中は、学生1人に専属の指導保健師が配置され、デモンストレーションなどで指導を受けた後、地域住民に対し健康教育を行う。また、吉備国際大学では指導内容の統一を図るために、実習施設の指導保健師が一堂に介した事前打ち合わせ会議や、実習施設での実習計画の打合せを行い、実習目標や指導方針などの共通理解を図っている。

3. 方法

3.1 調査対象

公衆衛生看護学実習を履修した4年生22人を調査対象とした。

3.2 調査方法及び調査期間

調査の主旨を書面および口頭にて説明し協力を求めた。研究の趣旨に同意し協力の得られた学生に、公衆衛生看護学実習の前後（平成28年11月22日～12月26日）に無記名自記式質問紙調査用紙を一斉配布しその場で記載した。調査票は学生各自で回収箱へ提出した。

3.3 調査項目

学生には基本属性・健康教育のテーマ・対象者・健康教育を実施した実習週数を尋ねた。健康教育の自己評価は、牧内らの「健康教育評価チェックリスト」を用い、目標1項目・タイトル1項目・内容7項目・会場1項目・媒体2項目・態度4項目⁹⁾に、対象者の理解2項目を加えた18項目で尋ねた。さらに、実施した実習週数による評価・健康教育を実施する必要条件について自由記載を求めた。

3.4 分析方法

「健康教育評価チェックリスト」の評価は5段階で

行い、「大変良い」5点、「良い」4点、「普通」3点、「あまり良くない」2点、「良くない」1点とし、評価を比較するためにKruskal-Wallis検定を行った。解析には統計パッケージSPSS ver.19を使用し両側検定にて危険率5%を有意水準とした。また、学生が自由記載した文章をまとまりのある1文を単位とし、内容の類似により文脈をまとめコード<>、サブカテゴリー《》，カテゴリー【】に分類した。分析には看護学を専門とする研究者からスーパーバイズを受けた。

3.5 倫理的配慮

本研究は、吉備国際大学倫理委員会の承認（2016年11月16日承認番号16-29）を得た。研究にあたっては、調査参加者に研究の趣旨、目的、方法、研究協力は任意であり、プライバシーは厳重に保護され、成績等に不利益は生じないこと、研究目的以外には使用せず、研究成果を個人が特定できない形で学会等に公表することを書面及び口頭にて説明した。研究参加者より、調査票の提出をもって同意の意思確認とした。

4. 結果

4.1 対象者と健康教育の概要

調査票を回収した学生21人（回収率95.5%）を分析対象とした。学生21人は2～4人のグループに分かれ7市町で実習を行った。健康教育を20人が1回、1人が同一テーマで2回、市町実習の1週目に6人（27.3%）、2週目に8人（36.4%）、3週目に8人（36.4%）行った。実習市町の年間保健事業計画により実習前に示された、子どもの事故予防などの母子保健3件（13.7%）、インフルエンザ予防などの感染症対策6件（27.3%）、乳がんの自己検診やメタボ予防などの生活習慣病予防6件（27.3%）、認知症や転倒予防などの介護予防7件（31.8%）をテーマとして行った。

4.2 実施週別の学生の健康教育自己評価

学生が市町実習中に健康教育を行った実習週別の健康教育自己評価を表1に示す。実施週別には健康教育評価のすべての項目で有意な差を認めなかった。自己評価が最も低かった項目の平均値および標準偏差は、「参加者が相互に話し合える雰囲気づくりができたか」で1週目 3.17 ± 0.41 、2週目 3.30 ± 1.06 、3週目 3.20 ± 0.84 だった。最も高かったのは「学生として相応しい態度・服装だったか」で、1週目 4.67 ± 0.52 、2週目 4.70 ± 0.48 、3週目 4.80 ± 0.45 だった。また、健康教育を行った時期で困ったことがあったと回答したのは3週目に行った2名のみで、実習終了日の最終カンファレンスと同日であったことを理由に挙げていた。

4.3 学生の健康教育を行うための必要条件
 学生21人が自由記載した健康教育を行うための必要条件を表2に示す。記述の類似性を検討した結果、

81コードから14サブカテゴリーを抽出し、最終的に【展開の技術】8コード(9.9%),【学生の準備性】21コード(25.9%),【学生の達成感】28コード(34.6%),

表1 健康教育評価チェックリスト (学生21人の実施週別自己評価)

項目	評価内容	実施週	平均値	標準偏差	p値
目標	目標の設定(理由)は適切だったか	1週目	4.00	0.63	0.780
		2週目	3.80	0.63	
		3週目	3.80	0.45	
タイトル	内容を表現するタイトルの付け方だったか	1週目	3.83	0.75	0.125
		2週目	3.70	0.48	
		3週目	4.40	0.55	
対象者の理解	テーマに対する対象者の背景(年代・関心度意欲等)を理解していたか	1週目	4.00	0.63	0.529
		2週目	3.70	0.67	
		3週目	3.60	0.55	
	テーマに関する対象者の健康課題を理解していたか	1週目	4.17	0.41	0.179
		2週目	3.70	0.48	
		3週目	3.80	0.45	
	対象者が興味を持てる導入となっていたか	1週目	4.33	0.52	0.149
		2週目	3.70	0.82	
		3週目	3.60	0.55	
	健康教育の目的を明確に伝えていたか	1週目	4.33	0.82	0.489
		2週目	3.80	1.14	
		3週目	3.80	0.45	
	内容は分かりやすかったか(専門用語の使い方等)	1週目	4.17	0.41	0.289
		2週目	3.70	0.82	
		3週目	3.60	0.89	
健康教育内容	参加者に合う内容だったか	1週目	4.17	0.41	0.262
		2週目	4.00	0.67	
		3週目	3.60	0.55	
	内容に関する知識は充分であったか	1週目	3.83	0.75	0.095
		2週目	3.30	0.67	
		3週目	4.00	0.00	
	導入-展開-まとめの流れで話せたか	1週目	4.17	0.41	0.974
		2週目	4.10	0.88	
		3週目	4.20	0.84	
	時間配分は適切であったか	1週目	4.00	0.89	0.899
		2週目	3.80	0.63	
		3週目	3.80	1.30	
会場	会場の設営は適切だったか	1週目	3.67	0.82	0.707
		2週目	4.00	0.82	
		3週目	4.00	1.41	
媒体	媒体の作成は質・量とも適切だったか	1週目	3.67	0.82	0.459
		2週目	4.00	0.67	
		3週目	3.60	0.55	
	媒体を上手に活用したか	1週目	4.17	0.41	0.924
		2週目	4.10	0.88	
		3週目	3.80	1.30	
	落ち着いて参加者の反応を見ながら話せたか	1週目	3.83	0.75	0.907
		2週目	3.70	1.16	
		3週目	4.00	0.71	
態度	参加者が相互に話し合える雰囲気づくりができたか	1週目	3.17	0.41	0.650
		2週目	3.30	1.06	
		3週目	3.20	0.84	
	参加者の発言機会を適切に設けたか	1週目	3.67	0.82	0.794
		2週目	3.50	1.27	
		3週目	4.00	1.00	
	実習生として相応しい態度・服装であったか	1週目	4.67	0.52	0.885
		2週目	4.70	0.48	
		3週目	4.80	0.45	

Kruskal-Wallis 検定

表2 健康教育を実施するための必要条件

カテゴリー	サブカテゴリー (コード数)	コード (学生の記述をそのまま掲載)
展開の技術	対象の理解 (3)	①対象者との事前の関わりで特徴を理解できた ②対象者の情報を指導者から聞く
	関連情報の理解 (3)	①会場や使用可能な物品を確認する ②実施場所・当日の流れを知る
	健康教育の技術 (2)	①実習地で頂いた対象者に身近な資料を活用する ②媒体の使用方法を知る
学生の準備性	実習前の十分な準備 (7)	①学生自身が早く企画書などを作成する ②具体的なイメージが湧かず準備が不十分であった ③実習前に企画書や媒体を完成する
	心理的な余裕 (8)	①実習の最終週だったのでゆとりを持って準備できた ②実習の日々で相談ができる時間があった ③時間があることで気持ちに余裕があった
	健康教育への思い (6)	①対象者1人1人の表情を見つづめることの大切さを学んだ ②相手にどうやったら伝わるかをしっかり考えて実施するときと伝わると思った ③対象者が継続でき記憶に残る健康教育を考えた ④正しいことをしっかり伝え活用して貰いたいと感じた
学生の達成感	緊張と覚悟 (8)	①本当に緊張した ②緊張せずにできた ③一人でやるので他に頼れない不安があった ④緊張したが1人で行うので腹をくくって臨めた
	遣り甲斐と自信 (12)	①すべてを1で行うので大変だった ②最後までやりきること自信が付いた ③考えれば考えるだけモチベーションが上がった ④1人で初めての経験はやり甲斐があった ⑤その場に応じた臨機応変な対応ができた ⑥住民を対象にしたことでとても良い経験になった ⑦実際に行ったことで初めて分かることが多かった
	対象者の肯定的なメッセージ (8)	①健康意識の高い対象者の良い反応で楽しくできた ②住民の方と触れあえたことが何より嬉しかった ③住民の方の優しさを感じ実際に行ったことで自信に繋がった ④住民の方は思った以上に暖かく優しくだったので緊張が解けた
指導者の支援	指導者とのコミュニケーション (3)	①指導者としてしっかり連絡を取ることが大事 ②分からないことを積極的に聴けば問題はない
	指導者からのアドバイス (8)	①丁寧な指導があった ②3回のデモを行い修正した ③沢山のアドバイスがあった ④全力でサポートしてくださったので安心してできた
	早い時期からの指導 (6)	①実習前の指導者との打合せ ②実習地でのデモを早期に実施した ③指導者と早めに打合せを行う
実習体制	実習の工夫 (5)	①実際に実施した時に内容が被っていることが判明した ②実習最終日のカンファレンスとの同日実施は負担だった ③先輩が行った健康教育を事前に知ることイメージが付きやすい ④保健師が行う健康教育を体験することで自分の足りないことやポイントが分かる ⑤学生がやりやすいように広めのテーマを頂いたが、少し絞ったテーマの方が良かったと思った
	仲間と高めあう (2)	①グループメンバーからのアドバイスを生かした ②グループメンバーと練習したことで客観的に捉える事ができた

【指導者の支援】17コード (20.9%)、【指導体制】7コード (9.7%) の5カテゴリーを抽出した。

4.3.1 【展開の技術】について

《対象の理解》《関連情報の理解》《健康教育の技術》の3サブカテゴリーから【展開の技術】を抽出した。

《対象の理解》は、＜対象者との事前のかかわりで特徴を理解できた＞の3コードから捉えた。《関連情報の理解》は、＜実施場所・当日の流れを知る＞の3コードから捉えた。《健康教育の技術》は、＜実習地でいただいた対象者に身近な資料を活用する＞の2コードから捉えた。

4.3.2 【学生の準備性】について

《実習前の十分な準備》《心理的な余裕》《健康教育への思い》の3サブカテゴリーから【学生の準備性】を抽出した。《実習前の十分な準備》は、＜実習前に企画書や媒体を完成する＞の7コードから捉えた。

《心理的な余裕》は、＜実習の日々で相談ができる時間があった＞の8コードから捉えた。《健康教育への思い》は、＜相手にどうやったら伝わるかをしっかり考えて実施するときと伝わると思った＞の6コードから捉えた。

4.3.3 【学生の達成感】について

《緊張と覚悟》《遣り甲斐と自信》《対象者の肯定的メッセージ》の3サブカテゴリーから【学生の達成感】を抽出した。《緊張と覚悟》は、〈緊張した一人で行うので腹をくくって臨めた〉の8コードから捉えた。《遣り甲斐と自信》は、〈考えれば考えるだけモチベーションが上がった〉の12コードから捉えた。《対象者の肯定的メッセージ》は、〈健康意識の高い対象者の良い反応で楽しくできた〉の8コードから捉えた。

4.3.4 【指導者の支援】について

《指導者とのコミュニケーション》《指導者からのアドバイス》《早い時期からの指導》の3サブカテゴリーから【指導者の支援】を抽出した。《指導者とのコミュニケーション》は、〈分からないことを積極的に聴けば問題はない〉の3コードから捉えた。

《指導者からのアドバイス》は、〈全力でサポートしてくださったので安心してできた〉の8コードから捉えた。《早い時期からの指導》は、〈実習地でのデモを早期に実施した〉の6コードから捉えた。

4.3.5 【実習体制】について

《実習の工夫》《仲間と高めあう》の2サブカテゴリーから【実習体制】を抽出した。《実習の工夫》は、〈保健師が行う健康教育を体験することで自分の足りないことやポイントが分かる〉の5コードから捉えた。《仲間と高めあう》は、〈グループメンバーと練習したことで客観的にとらえることができた〉の2コードから捉えた。

5. 考察

学生が行った健康教育の自己評価と実施した実習の週数に有意差を認めなかった。このことは、学生が捉えた実習開始前の【学生の準備性】や早い時期からの【指導者の支援】により、実習開始前に媒体作成までを概ね完了していたことが影響していると考えられる。さらに、学生は準備する過程を通し単独実施への覚悟を固め、対象者からの肯定的メッセージを受け止めながら健康教育をやり切ったことで自信を獲得し、【学生の達成感】を感じたと考えられる。

しかし、五十嵐ら⁹⁾の結果と同様に「参加者が相互に話し合える雰囲気づくり」への自己評価が最も低かったことは、保健師が行う健康教育の見学や対象者と関わる機会が無かったことが少なからず影響したと考えられる。また、学生は保健師や先輩が行った健康教育の理解や見学から《実習の工夫》を抽出していることから、実習前・中に保健師の健康教育を見学する機会や対象者との交流を可能とする

【実習体制】が必要である。これらから、保健師が

地域で行う健康教育の見学などを授業や演習に取り入れ、実習と連動させたカリキュラムの構築が重要といえよう。

5.1 実施週別の学生の健康教育自己評価

牧内⁸⁾らや五十嵐ら⁹⁾は、学生の自己評価は実習内容に費やした時間に正比例し、時間が十分あることで健康教育の準備や指導を受ける機会が多くなり、学生の健康教育自己評価は実習の1週目より2週目が高くなると説明した。しかし、今回の調査結果では学生の自己評価と実習1週目・2週目・3週目に差を認めなかった。また、実施した時期で困ったことがあったと回答した2名の学生は、最も時間的余裕のあった3週目に健康教育を行っており、その理由として最終のカンファレンスと同日であったことを挙げていた。

実習週と健康教育自己評価に関連性を認めなかったことは、〈実習前に企画書や媒体を完成する〉からの《実習前の十分な準備》、〈実習の日々で相談ができる時間があつた〉からの《心理的な余裕》、〈相手にどうやったら伝わるかをしっかり考えて実施するときと伝わると思った〉からの《健康教育への思い》から抽出した【学生の準備性】が少なからず影響したと考える。さらに、実施時期に合わせた実習開始前の《早い時期からの指導》を実習指導者と教員が連携して行い、実習中には積極的な《指導者とのコミュニケーション》を取り、丁寧な《指導者からのアドバイス》を受けたことの影響も大きいといえる。3週間という限られた市町村での実習期間に、健康教育の準備を行うための時間を確保することは、健康教育以外の実習内容を体験する機会を失する可能性がある。これらから、健康教育実践力を育成する実習には健康教育への十分な準備が可能で、実習開始前から指導者の助言を受けることができる実習体制を保証する必要があるといえる。

また古田ら¹⁰⁾は、保健師の専門性である住民の主體的な健康づくり実践をエンパワメントするための健康教育を学生が実習で学ぶには、保健師の健康教育を見学し住民に働きかける意図を検討することが効果的であると述べている。学生は、〈保健師が行う健康教育を体験することで自分の足りないことやポイントが分かる〉などの《実習の工夫》を求めており、保健師が地域で展開する健康教育を実習開始前に見学できるフィールドワークを取り入れ、授業・演習・実習を連動させたカリキュラムとする必要があるといえる。

5.2 学生が捉えた健康教育を行うための必要条件

藤本ら¹¹⁾は、実習の目的を講義や学内演習で学んだ知識や技術・態度を応用して看護実践に必要な基

礎能力を習得することにあるとした。中でも、全てのライフステージの個人や集団・地域を対象に1次予防から3次予防までを担う公衆衛生看護は、学生が今まで経験したことのない広範囲な活動内容や視点を必要とする。また、学生は公衆衛生看護活動の実際を見聞きした経験に乏しく、保健師活動へのイメージを持ちにくいことから、講義や演習での多様な学びを可能な限り体験できる実習計画としている。しかし、公衆衛生看護学実習は学生にとって住民や指導保健師等の視線を常に意識する緊張感の高いストレスを感じる学習環境である。また田村ら¹²⁾は、指導者からの無関心な態度や否定されたと感じる体験を積み重ねることで学生は、実習意欲を低下させ委縮した態度を取るようになることを報告している。

しかし学生は、《指導者とのコミュニケーション》を積極的に行い、必要な時期に《早い時期からの指導》を受け、丁寧で多くの《指導者からのアドバイス》から【指導者の支援】を受け安心して実習に臨んでいた。さらに、学生が行うデモンストレーションに指導者から繰り返し指導を受けく考えれば考えるだけモチベーションが上がったから《やり甲斐と自信》を感じていた。

このことから学生への指導保健師の接し方は、学生が質問しやすい態度や雰囲気であったことや、必要時に適切な指導や支援が得られる人的環境が存在したことで、学生の積極性は引き出され達成感を感じる実習につながったと考えられる。

また、学生が多様な実習内容を充実した学びとするには、参加前に学習するための時間を十分確保することが重要である。そのためには、実習期間中での健康教育の準備時間を必要最小限に抑える必要がある。そこで、吉備国際大学では実習市町の健康課題を授業で地域診断し、その結果をもとに実習市町から提示された健康教育テーマによる企画書・指導案・媒体を作成し実習に臨んでいることから、学生は《実習前の十分な準備》《心理的な余裕》《健康教育への思い》の3サブカテゴリーから【学生の準備性】を捉えていた。また、《対象の理解》《関連情報の理

解》《健康教育の技術》の3サブカテゴリーから【展開の技術】を捉えていたことは、実習開始前の授業や地域診断演習で明らかになった実習市町の概要や健康課題が、実習で行った健康教育の学びと連動し理解が深まったと推察した。

加藤ら¹³⁾は、学生はお互い実習での体験や学びを積極的に話し合い、共有することで学びを深めているとしており、今回くグループメンバーと練習したことで客観的にとらえることができたの《仲間と高めあう》ことを可能とする【実習体制】を学生が捉えていたことから、グループメンバー同士で学習意欲を刺激しあう肯定的な人間関係づくりが重要と考える。

また前田ら¹⁴⁾は、グループは構成時期により違いはあるものの、協力し合って自分勝手な行動を慎み、互いに仲間であると感じ信頼関係が深まると述べている。2~4人で編成した実習メンバーは、実習前から共同で行う実習市町の地域診断演習をとおり、水口¹⁵⁾のグループの親和的要因である「協力しあえる」や「指摘しあえる」グループ関係を養い、臨地実習でも共同学習を行う良き理解者や仲間として相互に刺激し合う効果的なグループダイナミクスが働いたと推察した。

6. 結論

公衆衛生看護学実習を履修した4年生21人を分析対象とし、健康教育を行った実習週数と学生の自己評価の関連を明らかにした。その結果、学生の自己評価は実施週数に有意差を認めなかった。このことは、学生が捉えた【学生の準備性】【指導者の支援】から、実施時期に関わらず実習開始前に媒体作成までを概ね完了していたことが影響したと考える。また、学生は準備の過程で覚悟を固め、対象者からの肯定的メッセージにより自信を獲得したことで、【学生の達成感】に至ったと考えられる。しかし、「参加者が相互に話し合える雰囲気づくり」への自己評価が最も低かったことは、実習開始前から実習施設と大学が連携した【実習体制】が重要といえる。

謝 辞

本研究にご協力いただきました、学生の皆様に深謝致します。

文 献

- 1) 村嶋幸代：公衆衛生看護支援技術。宮本ふみ、田村須賀子、上野昌江、松下拡、蔭山正子、田口敦子編、最新保健学講座2、メヂカルフレンド社、東京、166-191、2015。
- 2) 厚生労働省：保健師教育の技術項目の卒業時の到達度。
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2009/04/d1/s0428-8m.pdf>, 2010. (2017.7.15確認)

- 3) 全国保健師教育機関協議会：「保健師教育の課題と方向性明確化のための調査」報告書。第2版。
<http://www.zenhokyo.jp/work/kenkyuu-kako.shtml>, 2009. (2017.7.15確認)
- 4) 全国保健師教育機関協議会保健師教育検討委員会：保健師教育におけるミニマム・リクワイアメンツ全国保健師教育機関協議会版(2014)―保健師教育の質保証と評価に向けて―。一般社団法人全国保健師教育機関協議会, 東京, 2014.
- 5) 矢島正栄, 小林亜由美, 小林和成, 桐生育恵, 梅林奎子：保健師基礎教育における健康教育技術の教育のあり方。群馬パース大学紀要, 4, 517-525, 2007.
- 6) 太田ひろみ：基礎技術 健康教育。井伊久美子, 荒木田美香子, 松本珠実, 堀井とみよ, 村嶋幸代, 平野かよ子編, 新版保健師業務要覧, 第3版, 日本看護協会出版会, 東京, 126-131, 2018.
- 7) 田中富子：看護学生の「健康教育」実践力を実習で育成する方法―公衆衛生看護学実習における学生・指導保健師の評価比較―。川崎医療福祉学会誌, 27(2), 545-553, 2018.
- 8) 牧内忍, 仲間紀子, 川崎道子：地域保健看護実習における学生の健康教育の改善―学生と指導保健師の評価得点に比較―。沖縄県立看護大学紀要, 10, 55-61, 2009.
- 9) 五十嵐久人, 尾上佳代子, 鶴田来美, 長谷川珠代, 風間佳寿美：地域看護学実習における実習経験内容と自己評価。南九州看護研究誌, 15 (1), 61-65, 2007.
- 10) 古田加代子, 佐久間清美, 興水めぐみ, 白石知子, 久米智美, 秋山さちこ：地域看護学実習における学生の健康教育の実施状況と学びの検討。愛知県立看護大学紀要, 12, 33-40, 2006.
- 11) 藤本裕二, 山川 裕子, 中島 富有子, 高田 清佳, 藤崎郁, 楠葉洋子：看護学生が臨地実習において教員および看護学生に求める資質と能力。保健学研究, 23(1), 9-16, 2010.
- 12) 田村美子, 白木智子, 進藤美樹, 田村紀子, 中柳美恵子：看護学生が臨床指導者から受ける否定的ケアリング体験。看護教育, 45(9), 748-752, 2004.
- 13) 加藤法子, 渕野由夏, 永嶋由理子, 津田智子, 山名栄子, 中野榮子：基礎看護学実習1における教育効果の検討―実習前後の学習意欲の変化から―。福岡県立大学看護学研究紀要, 5(2), 52-60, 2008.
- 14) 前田勇氣子, 弓場紀子：臨床実習グループに対する肯定的な認識に関わる要因―編成後の経過における特徴―。大阪市立大学看護短期大学部紀要, 3, 37-43, 2001.
- 15) 水口陽子：看護学実習グループの人間関係に関する文献研究。新潟県立看護短期大学紀要, 9, 3-11, 2004.

(平成31年1月4日受理)

Comparison of Nursing Students' Weekly Self-evaluations for "Health Education" in Community Health Nursing Practical Training

Tomiko TANAKA

(Accepted Jan. 4, 2019)

Key words : health education, student at nursing school, promoting practice power, community health nursing practice

Abstract

This study aimed to analyze the conditions necessary for implementing health education that facilitates nursing students' comprehension and elicits positive perceptions and behaviors with regard to weekly self-evaluations of health education spanning three weeks of practical training in community health nursing. Participants in the study consisted of 22 fourth-year nursing students who had enrolled for this training. No significant differences were observed in the students' self-evaluations for each week of practical training when health education was being implemented. This suggests the influence of how, due to the students' grasp of "readiness" and "support from instructors," their preparations for health education were generally completed before the start of practical training. In addition, the students also decided to prepare mentally for a single implementation through the process of preparing for health education and gained confidence owing to positive messages received from instructors and partners, which were believed to lead to "the students' sense of accomplishment." However, the fact that the students had low self-evaluations with regard to "creating an atmosphere in which participants can talk to one another" suggests the need to build a "practical training structure" in partnership with the university and the training facility before the start of practical training.

Correspondence to : Tomiko TANAKA

School of Health Science and Social Welfare
Department of Nursing
Kibi International University
Takahashi, 716-8508, Japan
E-mail : tomiko@kiui.ac.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.28, No.2, 2019 485 – 492)